

平成31年度 地理歴史科

教科	地理歴史	科目	世界史A	単位数	2単位	年次	2年次
使用教科書	『世界の歴史 改訂版』（山川出版社）						
副教材等	なし						

1 担当者からのメッセージ（学習方法等）

- ・歴史という時間の経過を軸を感じる。
- ・歴史的事象に「なぜ」の視点を持つ。
- ・歴史を背景とした世界の国の諸事情を踏まえ、現在の日本の在り方を考える。

2 学習の到達目標

- ・歴史的事実の洞察力を身に付け、現代に生きる力を養う。
- ・歴史を過去の事象とせず、現代の課題と考えることで、未来を考察する糸口とすることができる。
- ・世界の歴史を深く理解し、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

3 学習評価（評価規準と評価方法）

観点	a: 関心・意欲・態度	b: 思考・判断・表現	c: 資料活用 of 技能	d: 知識・理解
観 点 の 趣 旨	古代から現代までの世界の歴史に対する関心と高め、積極的に探究することによって、国際社会に主体的に生きる日本国民としての責務を果たそうとする。	現代世界の諸課題を歴史的観点から考察するために、国際社会の情報がどの立場からもたらされたかを公正に判断し、その結果を適切に表現する。	古代から現代までの世界の歴史に関する諸資料を、有用な情報として選択し、歴史的興味を高めるために使用し、とくに教科書の資料を活用する。	古代から近現代までの世界の歴史についての基本的な事柄を日本の歴史と関連付けながら理解し、その知識を身に付けている。
評 価 方 法	授業態度 〔主題学習〕 今日の学習課題のポイントを考える	定期考査 発問評価 〔主題学習〕 事件(事象)名の名前の付け方を考えさせる。	発問評価 〔主題学習〕 文字のあるものは音読 文字のないものは、鑑賞	定期考査 課題提出 〔主題学習〕 プリントによる内容のまとめ
上に示す観点に基づいて、学習のまとめりにごとに評価し、学年末に5段階の評定にまとめます。 学習内容に応じて、それぞれの観点を適切に配分し、評価します。				

4 学習の活動

学期	単元名	学習内容	主な評価の観点				単元(題材)の評価規準	評価方法
			a	b	c	d		
1学期	世界史へのいざない	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境と歴史 ・日本列島のなかの世界史 ・人類の歴史の始まり ・東アジア世界 ・南アジア世界 	○	○	○	○	<p>a:世界各地の文化が日本に様々な影響をあたえ、現在でも使用されている。漢字・漢文・漢人等の語句から、漢王朝が日本に与えた影響に関心を持つ。文明化を進める日本にとっての最初のモデルとして、隋唐帝国の構造・文化に関心を持つ。古代のインダス文明が、現代と比較しても優れた都市文明であった点について、関心を持つ。</p> <p>b:光武帝と金印の記述を見て、中国皇帝と倭の王の関係について考察。</p> <p>c:兵馬俑という秦の始皇帝に関わる遺物の図版で、中華帝国の壮大なスケールに気づく。遣唐使について、イメージを想起し当時の日中間の交流について考察する。ガンダーラ仏の外観から、ギリシアの影響について気づく。</p> <p>d:アフリカに誕生した人類が、どのように世界に広がっていったかを整理する。仏教とヒンドゥー教の成り立ちや教義体系の違いを学び、インドの民族宗教としての性格を理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業態度 ・発問評価 ・提出課題 ・定期考査
	世界の諸文明	<ul style="list-style-type: none"> ・東南アジア世界 ・西アジア世界 ・古代地中海世界 ・ヨーロッパ世界 	○	○	○	○	<p>a:人類最古の農耕文明が形成された西アジア世界の歴史的意義に気づく。近代世界にとっての「古典古代」としてのギリシア諸都市国家やローマ帝国の歴史的意義について考察する。</p> <p>b:ナイル川の氾濫とナイル河畔の農業のしくみの関連に気づき、古代エジプト文明の農耕的基礎を深く理解する。</p> <p>c:地図を参照して、アレクサンドロスの遠征がヨーロッパのみならず、西アジアや中央アジアにどのような影響をあたえたかについて考えてみる。</p> <p>d:アテネなどギリシアの都市国家と都市国家ローマの発展の過程および政体の変遷を多面的に比較し、それぞれの特質を理解、西欧社会の基盤をなしたローマ＝カトリック教会について、国家との関係を中心に理解する。イギリス・フランスにおける王権・集権国家の形成とドイツにおける分裂状態の固定化を対照させて考察し、このことが双方の近代化の進展に及ぼした影響を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業態度 ・発問評価 ・提出課題 ・定期考査

世界 の 一 体 化 の 始 まり	<ul style="list-style-type: none"> ・16世紀の世界と一体化の始まり ・明代の東アジア ・清代の東アジア ・サファヴィー朝とムガル朝 ・オスマン帝国 ・大航海とアメリカ征服 ・新しい時代の始まりとルネサンス ・宗教改革 ・スペインの時代からオランダの時代へ ・絶対王政と議会王政 ・東ヨーロッパの専制 ・大西洋経済 			○	○	<p>a:16世紀の世界にあつては物質的な豊かさや高度な精神文化の中心は、繁栄するアジアにあった点に注目する。近代世界の開幕を、世界観・人間観を含む文化思想の上で告げるものとしてルネサンスをとらえる。対抗宗教改革の組織的中心をなしたイエズス会が、戦国時代の日本にもザビエルらを派遣し、盛んにカトリックの布教をした背景に注目する。新大陸のもたらした富が、スペイン世界帝国の繁栄の基礎をなしたことを映画をとおして理解する。またスペインが没落してオランダが覇権を握った要因を多面的に考察。</p> <p>b:アメリカ大陸とアフリカ大陸の文明について、それぞれの文明の特徴を比較する。清の成立により、周辺諸国がどのような対応をしたか整理し文章にまとめる。</p> <p>人口的には少数である満州族が、圧倒的な多数を占める漢民族にどのように対抗したか理解し考える。ヨーロッパ人に海外進出を促した背景や、ポルトガル・スペインの両国がその先頭に立った理由をまとめる。イタリアでルネサンスが開花した背景、都市の経済的繁栄や教皇・貴族・大商人らによる文化の保護、ローマ帝国の伝統などに留意する。</p> <p>絶対王政と議会政治という、イギリス・フランス両国の国政の原理的な相違とともに、強力な統一国家の出現という同質性にも注目する。</p> <p>c:香辛料と銀に関する図版を参照して、それぞれがどのような影響を世界に与えたかを考察できる。タージ＝マハルの写真や絵画など、教科書の図版を用いて両王朝の下での文化の洗練・爛熟の様相を感得することができる。ヨーロッパの海外進出の先駆者たちが開拓したルートを、地図上で確認できる。教科書の図版(特集ページも)を用いて、ルネサンス人たちが共有した人間中心の世界観を読みとることができる。ヴェルサイユ宮殿やルイ14世の図版を参照し、贅沢な王政の実態や背景について理解し、後進的な東欧でも、啓蒙専制君主の下では、西欧の宮廷生活と変わらない生活を営んでいたことが図版などからわかる。</p> <p>d:大航海時代に続く西欧諸国の世界各地への進出・支配の進展という形で、真の意味での世界の一体化が始まる背景を理解し、ポルトガル・スペインに次いでオランダやイギリス・フランスもアメリカに進出し、のちのアメリカ合衆国の母体となるイギリスの北米植民地が形成されたことを理解する。免罪符について調べる。フリードリヒ2世・ヨーゼフ2世・エカチェリーナ2世の事績から「啓蒙専制君主」登場の背景を理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業態度 ・発問評価 ・提出課題 ・定期考査
		○		○	○		

2 学 期	近 代 の 世 界	・啓蒙とアメリカ独立	○		○	○	a:啓蒙思想誕生の背景と、その後のヨーロッパに与えた影響を整理、特権階級の貴族の王政に対する反抗が革命に繋がり、ナポレオンが制定した民法典(ナポレオン法典)の大きな歴史的意義に注目する。ナポレオン戦争の結果成立した復古的なウィーン体制が、ヨーロッパの国際秩序として約30年続いたことに注目、「フロンティア」の語義と、意義を学び、大陸国家となった合衆国が、「フロンティア」消滅とともに海外膨張に転じたことに注目する。	・授業態度 ・発問評価 ・提出課題 ・定期考査
		・フランス革命	○		○	○		
		・ナポレオンとその帝国	○	○	○	○		
		・イギリス産業革命				○		
		・ウィーン体制と自由主義改革		○				
		・1848 年革命とイギリス・フランス		○	○			
		・クリミア戦争とオーストリア・ロシア		○	○	○		
		・イタリアの統一とドイツの統一		○	○			
		・アメリカ合衆国の発展とカナダ	○		○			
		・ラテンアメリカと世界資本主義						
		・19 世紀の西アジア			○			
		・南アジア・東南アジアの植民地化		○				
		・東アジアの開港と変動		○	○			
		・東アジアの近代化の試み		○	○			
							b:干渉戦争という外圧のなかで急進化した革命が、革命独裁から恐怖政治に行き着くメカニズムと、ナポレオン登場の背景をフランス革命史のなかで、革命独裁崩壊に関連づける。ウィーン体制を考察する。支持基盤を持たないナポレオン3世の政権は不安定で、国民の人気にたよる政策の成否にその浮沈がかかっていたことを理解しまとめる。クリミア戦争勃発の背景となった国際対立について、教科書の図版を使い「東方問題」の文脈のなかで把握する。中世以来分裂を続けてきたイタリアとドイツが、19世紀後半に相次いで統一国家の建設に成功したのはなぜか、考える。南北戦争の背景となった利害対立について、南北間の産業構造の相違を軸にまとめる。南京条約・北京条約で合意された内容から、不平等条約たる所以を理解し、洋務運動と明治維新の同時代性と、それらがいずれも「西欧の衝撃」に対する対応であったことを学び、日中両国のその後の進路が大きく隔たった理由を主体的に考察する。	
							c:教科書の地図で、独立当初の13植民地の状況と、その後の発展と関連づけ、年表を利用し、独立革命の進行をまとめる。地図でナポレオンが一族を元首とする従属国や同盟国の支配者として、一時とはいえ「大陸制覇」を実現したことを確認。1848年の革命が、短期間にほぼすべてのヨーロッパ諸国で連鎖的に民衆革命が爆発した革命だったことを理解。教科書の地図を用いて、ロシア帝国の南下政策の背景、その地理的条件を考察。教科書のドイツ皇帝即位式の図版などから、ドイツ帝国の極めて軍国主義的な雰囲気を見取できる。アメリカの経済的発展のもとで発達したトラストを、背景と影響を考察。教科書の地図を見て、旧スペイン・旧ポルトガル両植民地からの独立国出現のプロセスを整理。アヘンと銀の流入量・流出額のグラフをみて中国国内における影響について考察できる。	
							d:アメリカ独立戦争が、近代革命・市民革命としての性格を備えていたことに注目、フランス革命は、貴族・ブルジョワ・都市民衆・農民などの諸階級による複数の運動から始まり展開する複合的な革命として理解し、ナポレオンの大陸支配が各地に革命の理念を広める一方、諸民族の自覚を促し、それがナポレオンの没落につながったことを理解する。イギリスでは、貧困・犯罪などの社会問題に、労働者・若者を学校・労務所・監獄などの施設で訓練することで対処しようとしたことを理解。ロシアで長らく続いていた農奴制の実態について学び「上からの改革」の中心に位置づけられた農奴解放の歴史的意義を学ぶ。	

	現代の始まりと帝国主義	<ul style="list-style-type: none"> ・資本主義社会の成熟 ・世界分割と一体化の進展 ・帝国主義の国際対立 ・植民地・従属国での民衆の抵抗 ・第2次産業革命 ・日露戦争と韓国併合 ・辛亥革命 	○	○	○	○	<p>a: アジアの国・日本がヨーロッパの大国・ロシアに勝ったことがアジアの民族主義への励みとなったことと、その後の日本がアジアへの侵略・支配に向かったことを、よく理解する。「8カ国連合軍」の写真により、義和団事件鎮圧の国際的性格を理解する一方連合軍の中で日本軍の果たした役割の大きさに注目できる。</p> <p>b: 現代大衆社会の原型である 1920 年代のアメリカに注目し、日本における大衆社会の成立(高度成長期)とのタイムラグの大きさに気づく。相対的地位を低下させるイギリスと新興の大国ドイツの関係を中心に、この時期に、各国の経済的・軍事的実力と植民地領有の間にアンバランスが生じていることに注目する。日露戦争において日本は決定的な勝利を得たとは言えず、ロシアの国内情勢のため、有利な条件で講和したことを理解しする。</p> <p>c: 教科書の写真・図版や viewpoint「大衆社会と科学技術」で、1920 年代のアメリカに現代の大衆社会の原型が誕生したことを感得し、教科書の図版や歴史地図を用い、世紀転換期に向けて急激に進行したアフリカ分割と中国分割を整理、この時期の植民地獲得競争の過熱した状況に気づく。教科書の図版を比較して、ビスマルク時代の国際関係が 20 世紀初頭にはどのように変化したか、その原因・経過に関して理解できる。地図を利用し日露戦争の主戦場を確認し、日露戦争を契機に国際対立の様相の変化を理解。</p> <p>d: 第 2 次産業革命の特徴を整理する。日露戦争後に、日本が韓国の保護国化を着々と進め、ついにその独立を奪ったプロセスを整理する。清朝の下での改革をめざす洋務派・変法派、清朝打倒をめざす革命派、義和団に見られる様な排外的な民衆運動といった変革の諸路線の立場の相違を明確に理解できる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業態度 ・発問評価 ・提出課題 ・定期考査
--	-------------	--	---	---	---	---	---	--

3 学 期	二つの世界大戦	・第一次世界大戦	○		○	a:バルカン半島を舞台とする局地的紛争が、ヨーロッパの全主要大国を巻き込む大戦争に発展した原因・経過を考える。1920年代のアメリカに注目し、大衆消費社会・大衆文化の原型が成立していることに注目する。ファシズムの一般概念を理解し、ドイツ・イタリア・日本各国のファシズム体制の異同と特徴を比較考察する。第二次世界大戦発生の原因に関心を持ち、直接の原因・根本的な原因など、様々な要素を挙げて主体的に考察する。日本はなぜ、強大な敵アメリカとの戦争に踏み切ったのか、石油資源の問題などを含め、多角的に検証する。	・授業態度 ・発問評価 ・提出課題 ・定期考査
		・ロシア革命		○	○		
		・ヴェルサイユ体制とワシントン体制			○		
		・1920年代のアメリカとヨーロッパ	○	○	○		
		・アジア諸地域の抵抗と独立				b:二月革命の結果出現した状況を「二重権力」状態として把握し二つの革命の相違を明確に理解する。大衆民主主義のアメリカとファシスト政権のドイツが、大規模公共事業を軸とする有効需要創出政策を採るなど、ほぼ同様の恐慌対策に向かったことに注目する。日本・ドイツ・イタリアのファシズム体制について、国内の全体主義体制の確立と対外侵略政策の強行との関連に注目し文章にまとめる。満州国成立の写真から建国の背景・国際状況について把握し、文章にまとめる。当初優勢に戦いを進めていたドイツが、やがて東部戦線で躓き敗北にいたるプロセスを的確に理解し文章にまとめる。	
		・東アジアの民族運動			○		
		・世界恐慌		○	○		
		・ファシズムの台頭	○	○			
		・第二次世界大戦前夜の世界			○	c:図版を参照し新兵器の登場など戦争のテクノロジーの急激な「進歩」を確認、これにともなう戦術が変化「総力戦」化が現れたことを理解。マイカー時代の写真、アメリカの繁栄と人種差別問題の側面を指摘する。教科書のグラフで世界恐慌にともなう各国経済の崩壊を、工業生産指数の統計数字に即して理解できる。図解や地図を参照して、ドイツの領土拡大の背景、なぜ短期間にそれが可能であったかという理由、その拡大の方向などについて整理したうえで、当時の国際状況を把握できる。地図を用いて、ヨーロッパ戦線における戦局の展開について、大づかみに把握できる。地図を用いて、太平洋戦線における戦局の展開について、大づかみに把握できる。	
		・満州事変と日中戦争	○	○	○		
		・第二次世界大戦	○	○	○		
						d:ヴェルサイユ条約がドイツに課した義務の過大さに気づき、またこれが引き続き第二次大戦を引き起こす最大の要因の一つとなったことを理解する。国民党と共産党、孫文・蒋介石・毛沢東といった、革命政党・指導者の政治的立場・個性を理解する。アメリカで始まった恐慌がなぜ世界に広まったかについて、戦時債務の国際的流れの図を参考にして、理解する。中国本土への全面的な侵略を開始するという形で、他ならぬ日本が世界戦争の火付け役となったことを理解できる。	

平和と冷戦・現代世界と日本	・冷戦の開始			○	a: 第二次大戦後のアジア・アフリカで多数の独立国家が誕生したことに関心を持つ。71年の金・ドル交換停止、73年の変動為替相場制移行によって、各国通貨が国際通貨ドルを通じて間接的に金と関係する戦後の国際経済秩序が崩壊したことの意義に注目する。現在の世界を、戦後世界秩序の柱である冷戦体制の崩壊後の世界と位置づけ、冷戦終結の歴史的意義を多面的に考察できる。	授業態度 ・発問評価 ・提出課題 ・定期考査
	・冷戦の激化と核戦争の危機	○	○	○		
	・第三世界の出現	○	○	○	b: 「第三世界」の輝かしい理念とは裏腹に、政治的独立を果たした新興諸国が多く困難・矛盾を抱え込んだことを理解し、その背景・要因を考察して、文章にまとめる。70年代初頭にアメリカの覇権の後退が生じたことから、西欧諸国や日本の相対的地位が高まったことが、サミット開催の背景にあることに注目し、文章にまとめる。	
	・米・ソの動揺と多極化する世界	○	○	○		
	・冷戦の終結	○	○	○	c: ベトナム反戦デモと「プラハの春」の写真から、米・ソ両国で起こった動きを対比しながら理解する。教科書の記述をもとにペレストロイカから東欧革命・ソ連解体にいたる複雑なプロセスを、年表式にまとめ整理する。4次にわたる中東戦争の経緯、特にイスラエル占領地の拡大過程に注意する。図版を参照して、アジアにおける近代化・工業化のめざましい進展を数量的に理解する。	
	・グローバル化とアメリカ		○			
	・EUの拡充とロシア、アフリカ			○	d: 冷戦下の分断国家である南北朝鮮が、冷戦終結後も依然として対立を続けていることを理解し、現在の世界の諸問題に関連して、次の世代への責任という観点から、問題点を整理する。	
	・中東情勢とイスラーム主義運動					
	・アジアの経済発展					
	・中国の台頭と多極化					
	・地球社会の今後と私たち					
	・身近なモノから地球環境・地域紛争・情報社会を考えてみよう					

※ 表中の観点について a: 関心・意欲・態度
c: 資料活用の技能

b: 思考・判断・表現
d: 知識・理解